

余命三年のエース

凍夜

始まり

ここは都内の病院。そのとある個室に彼は居た。朝霧楓、本当なら中学三年になっている歳だが、彼は重度の病を持っていて、入院生活をしていた。

それは名前のない謎の病気で、精神的なものとしかわからず、治す術が見つかっていなかった。

その病の原因は彼が幼い時に受けた心の傷だった。

彼は生まれてすぐに親に捨てられたが、運が良かったのか、看護師をしている今の義理の母に拾われ育てられたが、小学生の時その母から事情を聞かされ、彼は人を信じなくなった。しかも、それが彼を苦しめる事にもなってしまった。

ある時、急な発作が起き、母が務めている病院に運ばれた。調べたが原因がわからず、とりあえず精神安定剤で発作を抑えた。それから朝霧は発作を繰り返したが、幸いなのがすぐに死んでしまう事はなかった。

それでも通常の日常が遅れなくなった彼は病院で過ごす事になってしまった。

その発作から五年が経ち、今彼は中学三年生になる歳になっていた。その間、発作も収まっていて、回数は減っていたがいつ起きるかわからないので、病院の中で過ごしていた。

それでも朝霧は暇だからと体は鍛えていて、普通に運動ができる、いや、すでにプロ並みの力を得ていた。朝霧は病院生活だが、規則正しくしており、成長もしている。身長も180あり体格も良い。しかも、今風のイケメンで、病院の看護婦達から目をつけられるほどだ。でも、彼は人を信じないので、性格は悪かった。良く言えばクールだが、無愛想というほうが正しかった。

そんなある時、彼の義理の母親である朝霧洋子から学校に行ってもいいと言われた。最初は面倒だと思っていたが洋子は楓の性格を知っている。うまく言われて楓は渋々承諾する事にした。

そして、それならと何か記録に残すかと思い、元々はあまり好きじゃないが、記録を残せる物としてスポーツをすることにした。

それが野球だった。その野球もそこまで好きじゃないのだが学生で一番記録に残せるのが野球で甲子園だったので彼は

野球部に入る事にした。

でも、簡単に甲子園に行けるチームじゃつまらないので
野球部があって、弱そうな所に入る事にした。

それがこの東京新華学園（とうきょうしんかがくえん）だ。

ここは良く言えば普通の高校で、悪く言えばスポーツも勉強も
普通以下くらいの高校だったので、そこまでお金もかからない
から朝霧は即決した。

でも、朝霧は中学には通ってないが、親が事情を説明した所
この学園の学園長が考慮してくれて、入学する事ができた。

その時に朝霧はこの無名校を日本一の高校にしてやると
宣言した。

そうして時が経ち、この学園の入学試験を受けて朝霧は合格し
この春から通う事になった。

――

四月、入学式が無事終わり、朝霧も高校生になった。そこから
二週間後に一年生は部活を選ぶ事になる。

朝霧はもちろん野球部を選ぶつもりだが、一つだけ問題が
あった。それは、朝霧は誰かと仲良くしたりしようとはしないので
部活に入れても孤立するだろうという事だが、朝霧はそれでも
構わないと思っていたのだが、一人の女子生徒との出会いで
それは解消されてしまう。

それが、同じクラスの女の子で大の野球好きな女子
神楽坂（かぐらざか）ほのかだ。

朝霧の隣の席で、ボーイッシュな性格に誰にでも声をかける
ので、隣の朝霧はすぐに話をかけられた。そこで彼女が
野球部のマネージャーをしようと言う事を聞かされ、朝霧も
野球部に入ると言ったら、目を輝かせ、一緒に甲子園行こうと
言われてしまった。

そんな事もあり朝霧は部活見学当日、野球部を見に行くことに
したが、そこで彼はとんでもない事をしてしま事になる。

怪物！朝霧楓VS天才バッターの勝負

放課後、朝霧と同じクラスの神楽坂ほのかは真っ先にグラウンドに向かい野球部を訪ねた。

そこには少人数の部員が居た。数えて十人程しかいなかった。朝霧はそれをわかっていて、だからここを選んだのだ。

二人は近くに行き、ジャージ姿で見学をしていた。そこに部員の一人が話しかけてきた。

「キミ達入部希望者？」

「ハイ。私はマネージャー希望です」

先に神楽坂が話してしまった。

「マネージャーか。そういうのは初めてだね。歓迎するよ。僕は三年で副主将の一条隼人（いちじょうはやと）だ。よろしく」

「私は神楽坂ほのかです。それでこっちが同じクラスの朝霧楓です」

「どうも」

「よろしく。いい体格だね。経験者かな？」

「いや、したことはない。練習はしてるがな」

「そうか。それでも入ってくれるとうれしいよ。うちは見ての通り、少人数で正直、公式戦で勝った事がないんだ。だからせめて最後ぐらい一回は勝ちたいなって思ってたね」

「大丈夫です。楓も入る事だし、今年は甲子園に行きます」

「ははっ！元気のいいマネージャーだ。これならみんなもやる気を出すかな」

「私が出させます」

「期待してるよ。じゃあ少し待っててね。他にも見学者が来たら色々説明するから」

「ハイ」

一条は戻って行った。二人はそこから見学を続けた。それから数人程、同じ一年の見学者達が来て、キャプテンの三島健太が色々説明をしていた。

すると、朝霧が前に出てきた。

「あの、いいっすか？」

「なんだ？」

「俺と勝負しませんか？」

「何？」

「俺が勝ったらレギュラーもらいます」

「えらく強気だな。まあうちでレギュラーっていてもたいした事はないが」

「それでも、早く決めれるならそうしたいんでね」

「まあいいだろう。俺は一応キャプテン出しな。でも、それなら俺よりバッティングがいい隼人との勝負にしないか？」

「確かに。あの人のほうがうまいっすね。それでいいです」

「うまいって見てもないのにわかるのか？まあいい。隼人」

「なんだい？」

三島は一条に説明をした。それを聞いて一条も面白いといい勝負を受ける事にした。

「確かにキミは強そうだけど、経験がないのはかなり大きいよ！それでも勝負する？」

「もちろんだ。さっさと決めようぜ」

「じゃあしようか」

一条は他の部員も呼び、今の事を話、二人の勝負をしてもいい事になった。

一条がどうせなら試合風にしたいと、他の部員も守備につけさすことにした。それは一年も同じで、今日は見学なのに参加できることに一年は少しうれしがっていた。

そして、勝負は朝霧がピッチャーをし、一条を抑えれば勝ちと言うルールになった。なので、朝霧の球を受けるキャッチャーが必要だったが、同じ一年で見学に来ていた一人が経験者という事で名乗り出てくれた。

「お前も面白い事するな。俺、そういうの好きだぜ。俺は高橋スバルだ。よろしくな」

「俺は馴れ合う気はない。一人でやらせてもらう」

「なるほど、そういう性格か。でも、俺が居なきゃお前の球を

取る奴はいないぜ」

「取れるのか？お前に」

「強気だな。まあ取って見せるがな」

「いいだろう」

「よし、じゃあ球種を確認しようぜ」

「必要ない。全部ストレートで良い」

「いいのかよ？いくら早くてもまっすぐだけだと」

「構わん。打たせなければいい」

「そう言っても楓、あの人だけこのチームでは別格だよ」

「知ってるのかお前」

「うん。ちゃんと調べてあるよ。このチームは本当に一度も勝ててないけど、あの人、一条先輩だけは全試合ヒットを出してるの。しかも、ああ見えてホームランも打てるからこの地区でもけっこう有名で、強打者としても有名だよ」

「ああ。俺も知ってるぜ。俺はシニアでやってたけどあの人の事は噂があったからな」

「そんなのはどうでもいい。相手が誰でも倒すだけだ」

「本当にたいした性格だ。よし、じゃあ倒しますか」

キャッチャーも決まり、一年も守備につく。一年は朝霧と高橋以外には三人しかいないが、後は先輩たちが守備についた。

それに気づいたのか、グラウンドの外では他の生徒達が野球部を見ていた。

一条も準備が終わり、打席に入った。朝霧は初めてのグラウンドのマウンドだ。しかも、今はジャージでくつも普通のモノだ。それでも足場を確認し、ボールの感触も確かめる。

そして、神楽坂が審判をし、本格的な勝負が始まる。

「それじゃ始めるよプレイボール！！」

その合図と同時に朝霧が構える。キャッチャーの高橋はど真ん中に構える。そして、一条も左打席で迎え撃つ。

「さっさと終わらせる。行くぞ」

「いいよいつでも」

朝霧が振りかぶった。そして、体を大きくひねり、そこから思いっきり投げた。

「トルネード!？」

それを見た他の部員が皆そう叫んだ。その構えから投げられたボールは高橋のミットに吸い込まれた。しかも、ものすごい勢いで、剛速球だった。

それに高橋も驚き、後ろに倒れこむようにボールを取った。その光景にバッターの一条もここに居た全員が驚愕していた。

「なんだあの球!!」

「すげえー早いぞ」

朝霧の投げた球はストレートだが、その速さは誰も見たことない様な物だった。それは高橋も一条もだった。

「マジかよ。なんだこの球?一条先輩、見えましたか？」

「いや、正直見えなかったよ。来たと思ったらもう君のミットに入っていたからね」

「俺も、こんな重くて速い球、初めてっすよ。あいつ何者なんだ？」

二人は話しているが、グラウンドは静寂の中だった。そこに朝霧が一条に話しかける。

「おい、続けていいか？」

「うん。いいよ。続けよう」

一条は普通に返事をしたが、心の中はものすごく燃えていた。今までこんなに早い球を投げる投手はいなかったので一条は本気になった。

そして、朝霧が二球目を投げる。

「行くぞ」

同じフォームから朝霧は投げた。さっきと同じど真ん中の

ストレートだ。

「甘いよ！」

「!？」

一条はこの剛速球を当てた。でも、前には飛ばず後ろに
だが。

「なるほど、さすがに言いセンスだな。なんであんたが
こんな所にいるんだ？」

「それは秘密。それより今は勝負を楽しもう」

「楽しめるかどうかは次で決めな」

朝霧は三球目を投げた。そして、その球は高橋のミットに
決まり、一条は三振をした。

「あの隼人が三振とわな。とんでもない怪物が来たぞ」

「その様だな」

「うわっ監督!？すいません。変な事してて」

「いや、面白い事になってるじゃないか」

三島の隣で話しているのはこの部の監督している女性の
井上翔子（いのうえしょうこ）だ。弱小チームにありがちな
監督不在みたいな感じで、彼女は臨時の監督だが
知識はあり、指導者としてもできる方ではあった。

その井上が全員を集合させた。

「全員集合だ」

「監督!？ヤバい。急げ」

「あれが監督？」

「楓、集合だよ」

全員井上の前に集まり、今の事を説明した。

「そういう事か。しかし、お前が三振とわな。一条」

「ええ。彼はとんでもない才能があります。おそらく
すぐにメジャーにも行けそうな程の」

「そんなやつがなんでうちに来たんだ？朝霧」

「ただの気まぐれです。とりあえず俺は甲子園で優勝するんで、投げさせてもらえますか？」

「いいだろう。うちは投手は一人しかいないしな。お前の様な怪物が入るなら甲子園もいけそうだ。それじゃ今年是一次戦勝利ではなく、甲子園優勝を目標にする！それには朝霧だけじゃなく、お前達も強くなってもらうぞ！もちろん、新入部員もな」

「ハイ！」

「マネージャーもいるみたいだし。楽しみだな今年は」

「最後まで持てばいいけどな」

朝霧はぼそっとそうつぶやいた。それでも、これからこの野球部で甲子園を目指していくことになる。

ここから朝霧の記録尽くしのストーリーが始まる。

朝霧の行動

朝霧と一条の勝負から一週間が経った。その間は部活の見学期間なので正式に部活に参加できるのは明日からだった。

しかも、その中で朝霧の事は学園中に噂で広まっていた。超剛速球を投げる一年がいると噂になり、一躍有名人になったが朝霧からすれば迷惑だった。

昼休み、朝霧は屋上に居た。いつもここで一人で昼食を食べているのだがそこに神楽坂と高橋がやってきた。

「居た！楓、キャッチボールしよ」

「断る」

「なんで！？野球部なのに！」

「俺は誰かと仲良くなるつもりはない。練習も必要ない」

「そうは言ってもな。野球は皆でするスポーツだぞ。特に俺とお前はバッテリーだ。互いの事を知ってないとうまくやってけないぜ」

「必要ない。俺にかまうな」

「そう言われると構いたくなるわね。ハイグローブ」

「お前な」

「ねえ私、もう一度あの球が見たいんだ。ねえ見せて」

「俺も取ってみたいぜ。あれを取れるようになれなきゃ座れないからな」

「あのぐらいで取れないなら座らない方が言い。あれはまだ半分力だけで投げた奴だからな」

「半分！？あれでか？お前、どれだけ球速があるんだよ」

「さあな。経験ないから計った事はない」

「本当にとんでもないな。でも、それが本当なら甲子園も夢じゃないぞ」

「うん。後は点を取れるバッターだね。うちはよくてキャプテンの三島先輩と天才の一条先輩だけだからね。いくら楓が抑えてくれても点を取らないと勝てないし」

「それなら俺も打撃は出来る方だから。なんとかなるさ。おそらくこいつの球を打てる高校生はいないだろうし」

「そうね。後は楓が一試合完投できるかだけど。どう？」

「何試合でも投げれる。予選から最後まで投げるつもりだ！その方が早く終わるからな」

「本当にそれだけの体力はありそうね。でも、無理はダメだからね。どこかで故障したらそこで終わりだから」

「そうになったら諦めるんだな」

それから朝霧は神楽坂に無理やりキャッチボールをさせられ昼休みを取られてしまった。

放課後はすぐに一人で下校した。正式な部活は明日からなので今日はまっすぐ家に帰った。

ここは学園から数駅離れた場所で、朝霧が入院していた病院からも近くにあるアパートだ。ここで朝霧は一人暮らしをしている。ここなら病院にも近いので何かあればすぐに行けるからと母親の洋子がここにさせたのだ。

洋子は自分の住んでるマンションがあるが、朝霧は一人になりたいと言って、普段はしない頼みをして、一人暮らしをさせてもらったのだ。

朝霧は家事も一人ででき、これまでが病院食だったので一人暮らしをしてからは好きな物を作り食べていた。

風呂に入り、勉強をする。朝霧はずっと病室で本を読んだり勉強をしているので頭も良い。勉強は暇つぶしにして居る為苦ではなく、それ以外では体を鍛えているぐらいだ。

それが朝霧の普段の生活だ。朝になり、朝霧は学園に向かう。

今日から部活があるからではなく、普段から誰よりも早く学園に登校していたのだ。それは普段うるさい場所だがこの時間なら静かなので朝霧はその時間を満喫していた。

そうしていると時間になり、部活に向かう。この新華野球部は弱小校だ。朝でも厳しい練習をするわけでもなく、ほとんどがだらけて練習をしている感じだ。

でも、朝霧の事もあり、監督の井上が一年生が入る今日から本格的に練習をする事になったため、部員全員が緊張の中グラウンドに集合した。

「そろってるな！これまでは私もなんとなくしかしてこなかったがこれからは本気で甲子園を目指してもらおうぞ。それができる投手が入ったからな。お前らも球児なら甲子園を目指せ」

「ハイ！」

「よし、それじゃ朝は筋トレを中心にするが、放課後は

特別な練習をするからそのつもでいろ」

井上は朝霧にその特別な練習の事を教えた。朝霧は面倒だが、しかたないので承諾し、付き合う事にした。

その放課後の練習時間。部員達は一人ずつ打席に立った。それは部員全員が朝霧の球を打席で体感し、それをバッティング練習にするのだ。

でも、朝霧の球を誰も打てるわけでもないが、その球で練習すれば他の投手と対戦するときに弱く感じると考え井上が考案したのだ。

その練習は効果があり、これまで全然打ててなかった先輩たちがバッティングセンターで打てるようになっており皆、練習が楽しくなっていた。

そして、その成果を試そうと二週間後に井上が練習試合をする事にした様だ。

その練習試合に合わせて皆練習をするが、朝霧はその前に確認する事があり、朝霧は病院に向かっていた。

初試合！新華学園VS最強聖覇学園で朝霧が最初の記録を作る

ここは東京のとある病院。ここに朝霧はやってきた。病院なので普通は待ち時間があるのだが、朝霧は個別で見てもらおうと、すぐに診察室に入った。

そこに居たのは朝霧の義理の母の洋子だった。前は他の人が朝霧を見ていたが、今は彼女自ら息子を診察していた。

「そうか練習試合か。練習は大丈夫なんだな？」

「とりあえずな。試合も問題ない」

「そうは言うが、本当の試合はいつもと違うぞ。緊張や慣れない筋肉の動きで、心臓に負担がかかるかもしれん」

「大丈夫だ。何かあっても俺はかまわん」

「お前はそうだが、私やせっかくチームになった皆はお前を心配するはずだ。そのお前が」

「うるさい。俺がどうなろうと俺の勝手だ。もう診察は済んだろ？なら俺は帰る！じゃあな」

「楓、たまには帰って来い」

「断る！」

朝霧は怒りながら勢いよくドアを開け閉めして部屋を出た。洋子は座りながら頭を抱えていた。野球部の誰かが楓の心に明かりを灯してくれないかと。

その朝霧は自分の部屋に戻ると、そこにいないはずの人が居た。

「おうお帰り！」

「また勝手に人んちで」

「そういうなって。私とお前の仲だろ？」

そう言ってるのは大人の女性で、朝霧の隣に一人で住んでいる近衛（このえ）さやかだ。今もそうだが普段から酔っ払い朝霧によく絡んでいる。

朝霧はここに来た時にとりあえずと隣だけにあいさつに行ったら彼女が居て、その時も酔っていたが、朝霧は普通に対応し、彼女はそれが気に入ったのか、朝霧とよく晩御飯を一緒に食べるようになった。人を信じない朝霧なら絶対一回だけの絡みだけかと思ったのだが、朝霧はなぜか彼女は

面白いと感じ、部屋に招き入れていた。合鍵も渡していた。

そんな中なので朝霧は近衛には自分の事を話したが普通はそこで同情されるのが定番だが、彼女は本気か冗談かわからないが、過去は気にするな！人生はこれからだと言われ、朝霧は初めてその時に少しだけ笑ったのだ。

「そうだな。じゃあ帰ってくれ」

「つれないな！ちゃんとお礼はするぞ。ほらっ」

彼女は酔っているせいか？服を下からまくり上げ胸を見せる。ちなみに酔っているからか？下着はつけていないので、全部見えていたが、朝霧はもう彼女の裸も見ているので、どうということはない。

それに朝霧は人嫌いなので女性にも興味はない。

その後、朝霧は近衛に手料理を作り食べさせ、今度試合をする事も話、それから帰らせようとしたが、帰らないのでしかたなく、近衛をかつぎ運び、彼女の部屋に連れて行き寝かせた。

それが朝霧の部屋での日常である。

――

それから日曜日になり、いよいよ朝霧達の練習試合が始まる。

対戦する学校はこの西東京で最強と言われている甲子園の常連校でもある東京聖覇（とうきょうせい）学園だ。

総人数百人を超え、有名な中学の選手は皆ここに入ってくると言われている学園で、甲子園でも優勝をしている強豪中の強豪だ。そんな所と超弱小の新華が試合をできるのは、監督の井上がここの野球部の監督と知り合いだからだった。

朝霧達はその聖覇学園に向かい、学園自体の規模の違い差に驚くが、朝霧だけは平然としていた。

グラウンドも広くそこは野球部専用のグラウンドでそこには数百人の部員達が練習をしていた。

朝霧達はグラウンドに入り、あいさつをする。井上は

相手の監督にあいさつをし、今日のオーダーを渡す。

「珍しいですね。新入部員が入った様で」

「ええ。それも極上の新入生がいますよ」

「ほうそれはそれは。でも、一人だけでは勝てませんよ」

「いや、勝てます。あいつなら」

「彼ですか？」

「ええ。投手です。おそらく、今日あなた達の野球感覚が変わるでしょう。楽しみにしてください」

「あなたがそこまで言うのですか。それなら楽しみにしましょう」

「よろしくお願いします」

二人はあいさつを終え、井上はベンチに入る。そのベンチの前では朝霧が初めてユニフォーム姿で、スパイクを履き野球部員という姿を見せていた。

もちろん背番号はエースナンバーの1番だ。その朝霧達の練習時間になりグラウンドを借りるが、井上がノックをしているのだが、外野はミスをしたり、内野も一条と三島以外もエラーを連発する。

その様子を見ていた聖覇部員は笑っている。しかし監督だけは険しい顔をしていた。

「どうしたんですか監督？」

「いや、相手はいつもの弱小チームの新華なのだがねどうも気になる選手がいるのだよ」

「誰です？一条ですか？あいつだけは別格ですからね」

「いや、一条くんではないです。あの投手ですよ」

「あの投手？」

マウンドで淡々と投げている朝霧を監督は見ていた。それからは気になる程とは思えない普通の投球練習だった。

「主将、彼には気を付けた方がいいですね。あの井上監督が自信に満ちてましたから」

「わかりました気をつけます」

練習も終わり、とうとう試合の時間になった。両校ベンチに集まり、気合を入れる。

「いいか？今日、我々超最弱校が最強の高校に勝つ時だ！気合入れていけ」

「ハイ！」

「朝霧、頼んだぞ」

「まあ遊んできます」

そうして両校整列し、試合が始まる。日曜なのでグラウンドの周りは見学者でいっぱいだった。もちろん全部聖覇学園の応援だ。

新華学園は後攻で、聖覇が先攻だ。つまりいきなり朝霧がマウンドに上がる。

新華学園の守備は、投手朝霧、キャッチャー高橋、ファースト一条セカンド松本、サード三島、ショート長瀬、レフト神谷、センター花崎ライト田島の守備だ。

そして、聖覇学園の一番が打席に入り、審判がプレイボールの合図をだし試合が始まった。

その朝霧の初試合での第一球で、最強と言われた聖覇学園は驚愕することになる。

高橋がミットをど真ん中に構え、サインを出す。そして朝霧が振りかぶり、体を捻じ曲げ投げた。

それに一番打者は打ちに行こうとしたが、ボールはあっという間にミットに入り、今までに聞いた事のないミット音がグラウンドに響いた。

審判さえ、コールするのを忘れるほどの速球はグラウンドを静寂にさせた。コールがないので高橋が審判に確認をする。

「審判、判定は？」

「あ、ス、ストライク——！！」

その声でようやくグラウンドが騒ぎ出す。

「なんだあの球!？」

「何キロ出たんだよ」

「あんな玉甲子園でも見たことないぞ!!」

聖覇部員が全員どよめいていた。それもそのはずだ。朝霧の球はゆうに150キロは超えていたからだ。

しかも超弱小校という事もあり、その投手がそんな球を投げるなんて誰も思っていなかったからだ。一投目を投げてから数分が経ち、二投目まで時間が掛ってしまった。

ようやくグラウンドも落ち着き、朝霧は二球目を投げる。それもストレートのど真ん中で打者は手が出ない。

三球目も全く一緒だ。結局、一番打者はバットを振らずに三振をし、それにグラウンドがまたざわつき始める。

その後の打者二人も朝霧は連続三振を取り、守備が終わった。

攻守交代で、朝霧達が攻撃をする。投手としての朝霧のインパクトは壮絶なものだったが、そこにさらに投手なのに先頭打者、つまり一番打者として朝霧が打席に立ったのだ。

「あいつ投手で一番かよ」

「なんなんだあいつは？」

聖覇部員も観客も朝霧の行動に驚きの連続だった。その朝霧は顔色一つ変えず、打席に入る。

相手の投手は三年でエースではないが、プロからスカウトされる程の投手だ。なので立ち上がりが悪いかはなくマネージャーの神楽坂からもこの人を打てないとエースを引っ張り出せないと言われた。

でも、そんなのは朝霧には関係なかった。相手の投手が構え、そして投げた。

その瞬間、朝霧はスイングをし、バットがボールをとらえそのまま打った。しかも、その打球は高く放物線を描きなんとセンターを超え、ホームランになった。

それにさらにグラウンドは静まり返った。朝霧は淡々とダイヤモンドを回り、ホームに帰ってきた。

「よくやった朝霧」

「どうも！」

ベンチで井上とハイタッチをし、座る。まだその光景が信じられない聖覇は誰も動けない状態だった。

それから試合は続行し、朝霧は投げ続けた。新華は朝霧、高橋、一条と主将の三島が打つがそれ以外は打てなかった。

投げては朝霧が全てストレートで投げるが、聖覇は誰もそのボールを打てず、最終回まで来てしまった。そこで誰かが朝霧がノーヒットノーランをしていることに気づき聖覇はあせり始めるが、もうすでに遅く、最後まで朝霧は疲れることなく、一試合ストレートだけという投球でしかも、ノーノーという記録まで作り聖覇学園に勝ってしまった。

さらに、新華の得点も朝霧一人によるものだった。

そうして、朝霧の初練習試合は1対0で新華学園の歴史的初勝利で終わった。

朝霧楓の名前が広まっている

歴史的勝利をした新華学園野球部は試合後、井上のいや、学園側のおごりで食事に出かけるのだが、朝霧はやはり参加せず一人先に帰った。

それは初めて高校の試合をして本人的には疲れてはないが、念のために病院で見てもらう為に帰ったのだ。

病院につき、診察をしてもらう。それは当然、洋子が見る。

「問題ないみたいだな。これで治っててくれればいいんだけどな」

「そんな簡単に治ったら病院はいらん」

「それもそうだ。でも、何もなくてよかった。それと、試合は勝ったんだろ？おめでとう」

「別に、大した相手じゃないからな」

「そうは言っても、相手は甲子園常連校なんだろ？それを抑えるのはすごいことだぞ」

「俺的にはすごくない。これからずっとそうしてくんだからな後、三年いや、もう三年は切ってるか」

「楓、お前は本当にこのままでいいのか？」

「くどい。俺はすぐにでも死にたい程なんだ。治す気はない。どうせ治らねえんだからな」

やっぱりケンカ腰になり、朝霧は病院を出ていった。朝霧はしばらくここには来ないでおこうと考えた。

――

土曜日。この日は普通に部活の練習なのだが、どうも学園内の様子がおかしい。

それは、今までどの部活にも他校や一般の見学者など皆無だったのに、グラウンドの柵の周りには一般の見学者等が野球部を見ていた。

実は、この新華学園があつた聖覇学園を破ったという噂が東京中の野球関係者に広まったのだ。

なのでそれが本当かどうか他校の生徒も高校野球のファンの者達も見に来ていたのだ。

その当事者の朝霧達は井上の話を聞いていた。

「やっぱりすごいな。あれだけの事をするよ」と

「でも、こういうのもあれですけど、それは楓一人が成し遂げちゃった事ですよ」

「そうだな。でも、それはうちの野球部がという事にもなる。他の者も朝霧に負けないように活躍しろよ」

「そうは言っても、朝霧と同じなんて無理じゃ」

「まあそれなりに活躍したいけどな」

「その弱い意識を持ったらダメだ！これからは全員が注目される。その事を考えてプレイするように」

部員達は話を聞いた後、練習に戻った。朝霧は自由に行動していた。それは、すでに朝霧はプロ並みの体力もあり、井上が教える程でもないの、自主練みたいな感じでやっていた。

それでも、相棒の高橋から付き合ってくれと頼まれる事もあるので、投げる事はあった。

「よし、いいぞ」

「めんどくせえな」

「そういうな。俺もお前の球に慣れないといけないんでな！この先、三年間よ」

「三年もいらん。今日で慣れろ」

「無茶いうな！ほらっ来い！」

「じゃあ行くぞ。死ね」

「待て！いきなり全力で投げるな」

朝霧はおかまいなく力を入れて投げた。それに高橋はとりあえず取るが、バランスをくずしての取りだった。

それでも、朝霧はまだ全力では投げていない。それと高橋も他の部員達にもまだ朝霧の本当の投げ方をまだ知らなかった。

そんな感じで練習も終わり、朝霧はめずらしく、高橋と神楽坂それに一条と三島に誘われて、バッティングセンターに行くことにした。

朝霧は見るだけにしていた。他のメンバーは練習をするが女子の神楽坂も打っていて、しかもちゃんと飛ばしていた。

「すごいねマネージャー。いいバッティングだよ」

「へへっ！打つのも好きだからね。たまにやってるんだ！

中学までは地元の野球をしていたしね」

「ぜひ、レギュラーになってもらいたいな隼人」

「そうだね。頼んでみようか」

「なれるといいな」

などと楽しんでいると、朝霧もそれに連れら？バッティングをする事にしたようだ。しかも、ここの最速で。

「本当にすごいなあいつ」

「うん。ここの最速を全部打ってる。しかも、ホームランの的に当ててるしね」

「楓って、すぐにプロに行けるんじゃないの」

「そうなってほしいね。そうすればうちの学園も一躍有名になるし」

「そうなれば、部にもいい選手が入って、強豪校の仲間入りになれるな」

そんな風に遊んでいると、朝霧のバッティングを見ていた他の客達が声をかけてきた。しかも、制服を着ていた。

「もしかして、キミ達があの聖覇を倒した新華学園？」

「そうだけど。その制服は、東東京の去年代表校の東方高校？」

「ああ。俺は東方高校野球部でエースをしている西園寺亮介（さいおんじりょうすけ）だ。お前は一条だな！お前の事はこっちでも名前は知れてるぞ」

「それは光栄だね。でも、東のキミ達がなんでこっちに？」

「ああ。たまには違う所でもやりたいなって思ってな！そなたまたまここを見つけたんだ。なあ愁」

「うん。あ、僕は亮介の相棒でキャッチャーの桐谷愁（きりやしゅう）です。よろしく」

「よろしく」

「ところで、あのすごいバッティングしている彼がもしかて」

「そう。うちのエースだよ」

「あいつが聖覇をノーノーした奴か」

そう言って、西園寺は朝霧の方に向かった。

「よう。お前が朝霧か？俺は東東京の東方高校でエースの西園寺だ。よかったら俺と勝負しないか？」

「――断る」

「いいじゃねえか。練習だと思ってよ」

「練習なんか必要ない。帰れ」

「連れない奴だな。それでも野球部かよ」

「それ以上俺に話しかけるな！殺すぞ」

「な、なんだこいつ。目がマジだ」

「ごめん。彼、ああいう性格なんだ。ちょっと怖いけど野球に関してはたぶん、日本一だよ」

「確かにそうかもしれんが、あんなんでチームでうまくやっっていけるのか？野球はチームワークだぞ」

「それはまあそうだけどね」

「まあいい。それなら正式に部としてお前達と練習試合をすればいいだけだからな。よかったら試合してくれるか？

うちの監督には言っておくからよ」

「うん。それはこっちもいいよ。ね主将」

「そうだな。じゃあ監督に言ってみるか」

「助かる。それじゃ朝霧、試合で勝負だ」

「さっさと帰れ」

「本当に連れないな。じゃ俺らは帰るな」

「うん。また今度」

西園寺達は帰って行った。その後に朝霧達もバッティングセンターを後にしたが、神楽坂達は少しうれしそうだった。

それは、違う地区の方にまで朝霧の名前が知られている事がわかったからだった。

倒れる朝霧！？

翌日、三島が監督の井上に昨日の西園寺達、東方高校との練習試合をしたいという事を話した。

井上はすぐに承諾した。聖覇を倒して、今度は東の最強校東方と試合ができるならとすぐに連絡をして、東方から返事をもらい来週の日曜日に東方側が新華に来ると言う事で試合が成立した。

その試合に向けて井上は部員達にグラウンドの整備をいつも以上にしておくように伝え、学園もこれまでは何も協力をしてこなかったが聖覇を倒し、本当に甲子園が見えて来たと思い、野球部に全面協力をする事にした。

その部員達は朝霧を相手に全員が打席に立ち、バッティングの練習をしていたが、一条と高橋以外は皆三振の山だった。

でも、それは朝霧の球だからで、おそらくそれ以外の投手からなら打てると井上は思っていた。

それも部員達が自信をつけてきて、練習も楽しくなり力をつけてきたからだ。

そんな感じで練習をし、東方高校との練習試合の当日になった。

朝だが、グラウンドの周りを見学者でいっぱいだった。他校も偵察にまで来ている。

その中で練習をしている朝霧達の元に西園寺達東方がやってきた。

グラウンドに入り、あさいつをして、ベンチに行く。今までこの新華のグラウンドには一つだけしかベンチがなかったが、学園がこれからの事を考え、先週の間に用意したのだ。

井上が相手校の監督にあいさつに行く。

「今日はよろしくお願いします」

「こちらこそ。あの聖覇を倒したと言うチームと試合ができるのは良い事なのでお互い力を出しましょう」

「ハイ。お願いします」

井上は自分のベンチに戻った。すると、東方の西園寺が朝霧達の元にやってきた。

「よ！今日はありがとよ。試合してくれて」

「こちらこそ。東の最強校と試合ができてうれしいよ！
よろしく」

「ああ。それにちゃんとあいつが先発みたいだしな」

「そうだぜ。そっちはノーノーも覚悟しておきな」

「心配ない。絶対俺が打ってみせるぜ！じゃあ朝霧
よろしくな」

朝霧は返事をしなかった。西園寺もやっぱりかとそのまま
自分の側に戻った。

両方準備が整い、試合が始まる。先攻は新華だ。後攻が
東方で、先発は西園寺だ。甲子園経験者で評価も高いが
優勝はしていない。

それでも、朝霧以外には厳しいかと思われたのだが
そうでもなかった。

最初の打席は前と同じ朝霧だ。なのでいきなり西園寺と朝霧の
勝負が実現する。

西園寺はサインを確認し、大きく振りかぶり、第一球を
投げた。西園寺はアンダーだ。それを見て朝霧は一球目を見
送ったが、それはストライクになった。二球目も朝霧は
見送り、簡単に追い込まれた。

「なんだ打つ気ないのか？なら三振を取らせてもらうぜ」

西園寺はそう言いながらも厳しいインコースに投げた。しかし
朝霧はそれをあっさり打ってしまった。

ホームランかと思われたが、ライトの後ろで落ち、二塁打に
なった。

「やっばすげえなあいつ。それでも二塁どまりなら成功だ！
あいつはホームランを打てるからな」

西園寺はとりあえず安心して、次の打者に集中した。そうして
二番を三振に取り、次は三番も一条だった。

当然、一条の事も知っているなので要注意と警戒をしていたが、一条はわざとカットをし、西園寺に球数を増やして体力を削る打撃をしていた。

それならと西園寺は一条を歩かせ、四番の三島と勝負する事にした。

三島も一応四番ではあるが、そこまで力はない。でも外野に飛ばす事はできるので、どうにか粘って外野に飛ばして朝霧を三塁に行かせた。先制のチャンスだったが下位打線では西園寺からはまだ打てず、点はとれなかった。

新華の攻撃が終わり、守備に入る。普通は攻撃の時の方が盛り上がるのだが、新華は朝霧がマウンドに立つほうが盛り上がった。

そして、朝霧が第一球を投げた。その球に一番は手も出せずワンアウトになり、後の二球も何もできず三振になった。

それに見学者がざわつきだす。やはりあの聖覇を抑えたのは本当だったんだと、誰もが朝霧の球に納得した。

そうして試合は進むが、この日は朝霧は打たせて取る投球で投げていた。それは、朝霧以外も活躍できる様にと、後、守備の練習もかねて井上にそうしろと言われたので、速球は投げず、コースをついた球にして守備の練習にさせていた。

それでもたまに速球を出すと見学者達は盛り上がるので時折三振も混ぜる。

そんなこんなであっという間に最終回になりやはりノーヒットノーランの状態になった。今回は打たせて取る投球だったので、内野のエラーなどはついているが実際はまだ朝霧は打たれてなかった。

そしてその最終回は打者二人を三振に取り、最後に西園寺の番に回ってきた。これまで西園寺の時は速球を投げていたので全部三振させられていた。

それでも西園寺はどうか打とうと集中をしていた。すると朝霧を見た西園寺が何か朝霧の様子がおかしいのに気づき、タイムを取った。

「おい、あいつ大丈夫か？」

「うん?!? 本当だ。おい、朝霧大丈夫か？」

西園寺に言われ高橋が朝霧の所に向かう。それに一条達も気づきマウンドに集まる。

「朝霧くん大丈夫か？」

「おい聞こえてるか？」

朝霧は返事をしない。しかも、これまで見たことない汗をかき、苦しそうだった。

「監督、楓、疲れたんじゃ」

「やはりあいつでも疲労はたまるか。でも、後一人だけ変えるわけにはいかないし、あいつ以外じゃおさえない」

ベンチも神楽坂と井上が心配していた。その本人はまだ下を向いたまま返事をしてなかったが、ようやく気づき返事をした。

「な、なんだ？こんな所に集まって？何かあったか？」

「何かあったのはお前だ。お前、今意識なかっただろ？」

「あ？あるに決まってるだろ。気がちる。さっさと元に戻れ」

「でも朝霧、汗がすごいぞ」

「心配ない。後一人だ。こんな所でタイムを使うな」

「やっぱり気づいてないじゃないか。タイムを取ったのは西園寺だ。俺達じゃない」

「――わかった。もう、大丈夫だ。戻れすぐに終わらす」

「本当に大丈夫だな。まあもう時間だ。皆戻るぞ」

三島が皆を戻らせた。高橋が西園寺審判に礼を言う。

「あいつ、大丈夫なのか？」

「ああ。返事をしたから大丈夫だとは思うが」

「それならいいが。勝負は勝負だからな」

「わかってます。手は抜きません」

「そうか」

そして、朝霧は西園寺に投げた。その球は速球で力はあった。それを見て高橋は大丈夫と思いそのまま速球を要求した。

アウトを二つ取り、いよいよ後アウト一つになったがそれは突然起きた。

朝霧は投げて、西園寺は空振りをし三振してゲームセットになったが、その瞬間、朝霧がマウンドで倒れたのだ。

それに高橋達が気づき朝霧の元に向けよる。

「朝霧！！」

ここに居た全員がどよめいた。一番驚いたのは同じ同じチームのメンバーだった。

すぐに井上が救急車を呼び、朝霧を病院に連れて行った。

朝霧野球部をやめる！？

病院に運ばれた朝霧。それに井上と神楽坂、高橋と一条に三島がついてきて病室で朝霧の様子を見守る。

医者に診てもらったが疲労がたまり、倒れたのだろうと言う判断で何日か休めば大丈夫と言われた。

井上達は少し部屋に残って様子を見ていた。

「監督、楓の親には連絡しなくていいんですか？」

「うん？ああ、それなんだがな。こいつ携帯とか持っていないんだ！しかも、どうも一人暮らしをしてるみたいでな。親に連絡が取れないんだ」

「一人暮らしって、高校生ですか？」

「ああ。それにちょっと気になる事もあるんだが」

と話していると、部屋に誰かがやってきた。

「楓！！」

「！？あの、あなたは？」

「申し訳ない。私は、楓の母親の朝霧洋子です」

「あなたが母親の。にしては若いですね。それにその格好」

「ええ。私は医者です。ここのではないのですが、別の病院で医者をしてまして、この病院とも関係があり息子が運ばれたと聞いたので急いで来ました」

「そうですか。私は監督の井上です。申し訳ありません。ここの医者は疲れがたまって倒れたのだと言っていたので、それをわからずに彼に無理をさせていたのかもしれない」

「わからないのは無理ないです。この子は何も言いませんから！」

「そうですね。でも、私達も彼は大丈夫だと確信もしていました。まだ一年だというのに」

「心配しないでください。この子は強いですから」

そう話していると朝霧が目を覚ました。

「あ、楓！気が付いた」

「神楽坂？ここは、病院か」

「そうだよ。急に倒れたから心配で」

「倒れた。そうか。監督もお前らも居るのか、！？なんであんたがここに居る？」

「楓、まだ起きちゃダメ」

朝霧は洋子を見つけ上半身を起こそうとした。

「お前が倒れたと聞いてな。駆けつけてきた。近くでよかったよ」

「大げさだ。だかが疲労で倒れただけで」

「朝霧、疲れてるならなぜ言わなかった？いくらお前でも無理をさせるわけにはいかないぞ」

「無理はしてない。今日はたまたまだ。もう平気だ」

「お前はもっと人を頼る事を覚えてくれ。誰かに頼るのは悪い事じゃない」

「無理だな。俺は誰も信じないし、俺は俺自身も嫌いなんだ！悪いが、誰にも頼る気はない」

「朝霧、それは相棒の俺もか？」

「相棒？勘違いするな！お前はただのミットだ。誰が相棒なんかにした」

「朝霧！！」

「ダメスバル！！」

高橋は朝霧に向かって行こうとしたが、神楽坂が止める。しかしそこに朝霧が、逆に高橋に向かって行き、服をつかんだ。

「やるなら来な！俺は人を傷つける事ぐらい、わけはない」

「朝霧」

高橋は抵抗してしまった。それに朝霧が反応し、とうとう高橋を殴ってしまった。

「止めろ朝霧！お前はまだ」

「黙れ！！」

「くっ！！」

朝霧は止めに入った三島達を吹き飛ばした。そこに今度は神楽坂が止めに入ろうとする。

「やめて楓！これ以上したら」

「もうアウトだろ。それともまだいいなら、お前も攻めるぞ！どうする」

「楓」

神楽坂は動けなかった。朝霧の本気の目に初めて朝霧に恐怖を感じたからだ。

「もうやめろ朝霧。病人のお前に言うのもあれだが、お前を少しの間、部活禁止にする。その間に疲れを取って冷静差も取り戻してくれ」

「俺はいつでも冷静だ。それに、少しの間なんかじゃなく俺は部活をやめる。やはり俺には人付き合いは無理だったみたいだからな」

「朝霧待て！」

朝霧は病室を出て行ってしまった。突然の事に動揺する神楽坂達。そこに洋子が話し出す。

「ごめんなさい。大丈夫？」

「俺は平気です。すいません。俺つい」

「いいえ、あれは誰でもああなってしまうわ。こちらこそごめんなさい。何もとめれなくて」

「あの、お母さん。どうして楓は、その」

「ごめんなさい。今は話せないわ。もし、話してしまったらあの子は本当に部活に戻れなくなるから」

「お母さん。話してください。私は彼の監督として大人として見守る責任があります。彼には聞いたと言う事はいいませんから」

「俺達も話しません。あの、聞かせてください」

「わかったわ。絶対、他には言わないでください。実はあの子は」

井上達はショックを受けた。あの超強気な朝霧にそんな事があった事に。神楽坂は泣き崩れるほどで、さすがの一条達も重く感じていた。

「監督、俺謝ってきます」

「待て。今言っても無理だ。それに、あいつには知られたら

まずい。今は黙っててくれ」

「わかりました」

「皆、今日は戻ろう。朝霧もいなくなってしまったしな。後は私もなんとかする。禁止にはしたが、やめさせるわけじゃないからな。皆はいつも通りにしてくれ」

「ハイ」

神楽坂達の返事は小さかった。朝霧がいなくなり病院を後にする井上達。洋子もここの医者に説明してから自分の病院に戻った。

一方、朝霧はまっすぐ自分の部屋に戻っていた。

そして、それから一週間。朝霧は部活どころか、学校も行かずに引きこもってしまっていた。

朝霧復活！！

夕方、いつもならグラウンドで部活をしている時間だが、今は学校にも行かず家に閉じこもっている朝霧。

そこに隣に住む近衛さやかがやってきた。

「どうした悩める少年」

「ほっとけ。そういうあんたも今日は早い帰りだな」

「お前が心配でな。早めに切り上げてきた」

「いらんお世話だ。帰れ」

「連れれないな。まあ今のお前がどういう状態かはわかってるつもりだよ」

「勝手にあがりこむな」

近衛は服を脱ぎながら、下着姿で朝霧のベッドに入り込んだ。

「今日はちょっと疲れてな。休ませてくれ」

「それなら自分の部屋に行け。そのための部屋だろ」

「一人より、誰かと居た方が癒される事もあるんだぞ。それはお前も同じだ」

「俺は違う。一人の方がましだ」

「強がるなよ。今のお前はすごくさびしいそうぞ」

「俺がさびしいなんて思うか？結局、あんたも俺の事は分らなかった様だな」

「いくら一緒に居ても、人の事は誰もわからないよ。例え愛し合ってる夫婦でもな。ましては、お前の様にもう長くない人の気持ちは簡単には理解できない。してあげたくてもな」

「ねえちゃん」

「それを少しでもわかる事ができるならそれは、お前の声を聞くことだ。そうすれば少しはわかってやれる」

朝霧は沈黙する。それを近衛はわかっているのに近衛は朝霧を抱きしめていた。

しばらくそうしていると、部屋のチャイムがなった。それを近衛が対応した。そこには神楽坂と高橋が居た。

「あの、えっと、ここ楓の家でいいんですよね？」

「ああそうだよ。もしかして、野球部の子かい？」

「は、ハイ。私はマネージャーの神楽坂ほのかです」

「お、俺は高橋スバルです」

高橋は目をそらしながら顔を赤くして言った。それは近衛が下着姿のままだからだった。しかも、赤い下着だ。

「ごめんねこんな姿で。ちょっとあの子を慰めてたから」

「あの子って楓の事ですよ？」

「ええ。私、隣に住んでて、あの子とは仲がいいのよ」

「そうなんですか」

「まあここで話してもあれだから、中に入りな」

「いいんですか？まだ楓の返事を聞いてないですけど？」

「いいよ。ここは私の部屋でもあるからね」

「そ、それじゃお邪魔します。楓いる？」

「ああ。悪いなアホな大人が出て」

「いや、それはその」

「お前も、いつまで恥ずかしがってんだ」

「だ、だってよ」

「キミ、かわいいわね。ちゃんとそういう反応してくれるなんて。楓なんて何にも感じてくれないのよ。裸を見ても」

「は、裸っすか！？」

「か、楓のエッチ」

「お前、早く服着て帰れ。ガキに色目をつかうな」

「ほらね。ああいう事いうでしょ。よかったらキミにもみせてあげるわよ。私、野球やってる子は好きだから」

「いや、それは」

「帰れ、変態女」

「しかたない。それじゃあとはよろしくね」

近衛は服を着て、部屋を出た。二人は沈黙していた。高橋はまだおどおどしていた。

「悪い。さすがの俺も、今のは謝る」

「な、なんかすげえなあの人。あれが大人の女性なのか？」

「あれは特殊だ。気にするな」

「ねえ、楓はああいう人がいいの？」

「いいわけないだろ！迷惑極まりない。お前の方がましだ」

「そ、そう？なんかいいのか悪いのか」

「まあいい。それで、何しに来た？今は部活の時間だろ」

「私達は少し早くにあげらせてもらったの。その、楓と話したくて」

「俺は話すことはない。帰りな」

「あのね楓、えっと」

「朝霧！！悪い。お前の事はあの人から聞いた」

「高橋くん！？」

「いいさ。たぶん、俺達がここに来た時点でこいつはわかってるだろうからな」

「ああ。気づいてる。あいつなら言うだろうからな！

それで？俺の事をわかったつもりか？」

「いや、わかったというより、わかりたくなかった。せっかくお前の様な怪物と一緒に組んで甲子園を目指せると思ったからよ。お前の事をしっちゃったら、続けさせる事をためらっちゃう。人の命より重いものはないからな」

「アホが。無理にでも続けさせるのが勝負事だろうが！俺は同情されるより、強制的にでもやらされた方がましだ。それで死ぬるなら俺のせいじゃねえしな」

「楓のバカ！！」

「！？」

神楽坂が朝霧の頬を叩いた。

「どうして簡単に死にたがるの？助からないのはどうしようもないかもしれないけど、それなら最後まで楽しくしたり笑ったりした方がいいじゃん」

「ちい、楽天的な考えだな。死ぬのがわかってて笑える奴はバカだ！何も残らないのに楽しんでも意味はない」

「残るよ！私達の中に。たぶん、楓がいなくなっちゃったら私は、皆もすごく悲しくなるよ。それでも、一緒に野球をやっていた仲間だから、絶対、何も残らない事はない」

「そうだ朝霧。まだ公式では組んでないが、お前が生きてる間に公式で組めばそれは一生消えない記録になる。ましては甲子園ならなおさらだ。だから、俺と甲子園で組んでくれ」

「. そこまでいければな。それに、俺が戻れる保証はない。監督には部活禁止って言われるからな」

「それはずっとじゃないよ。楓から言えば戻してもらえるよ。監督も楓には帰ってきてほしくて言ったから」

「学園側はどうなんだ？俺はずっとサボってるんだ。部活よりそっちがアウトだろ」

「そこも監督がお願いしてるみたいだよ。楓なら甲子園に連れて行ってくれるって言って、停学や退学にしない様になって」

「お前はそれだけすごいんだ。お前はもう一人じゃないんだぞ朝霧」

「まったく、めんどうな奴らだ。そこまで甲子園に行きたいのか」

「行きたい！！楓、一緒に甲子園に行こう。絶対楽しいから」

「ああ。行こうぜ楓」

「わかったよ。でもな、俺の事がわかってるなら監督は俺を無理には使わないだろう。だから、一つ条件をつける」

「条件？」

「俺なしで、他の学校相手に勝ってみな。元々は弱小校なんだ。俺を連投させれなくなるなら、その条件をクリアしないと甲子園なんて行けないからな」

「わかったぜ。なら、絶対お前なしで勝ってやる！そうすればお前も戻ってくるんだな？」

「できればな。その時は監督に頭さげて謝るさ」

「楓！！」

「くつつくな」

「朝霧、悪かったな。あの時、お前に殴りにかかろうとしてお前の事わかってなかったのに」

「気にするな。お前のやられる程、弱くわない。お前の方がやられてたしな」

「そうだな」

どうにか朝霧と打ち解け？た二人。朝霧もまだ完全に心を開いたわけではないが、とりあえず甲子園を目指す事にした。

それから高橋達は朝霧抜きで、試合をし、強豪校相手になんとか勝利をして、朝霧に条件をクリアした事をつたえ

言っていた通り、朝霧は井上と学園側に少しでも謝罪をし、反省をして、野球部に復活した。

新華野球部の遠征。そして、地方大会の組み合わせに。

六月始めの日曜日。新華学園のグラウンドに朝霧の姿があった。先週、井上からも正式に部活禁止が解かれて、学園や対戦していた東の東方の西園寺達にも謝罪をしたため、朝霧はこのグラウンドにいた。

そして、もうすぐ、来月から甲子園に向けての地方大会が行われるので朝霧達はそれに向けての練習をしていた。これまで甲子園どころか、地方大会での一回戦ですら諦めていたチームが、本格的に上を目指そうとしていた。

それも、朝霧が会っての事だ。最初は朝霧一人に頼って行けると思っていたが、三島や一条以外の部員、全員が朝霧の事を聞かされ、全員が朝霧の為に甲子園に行こうと決意し、早朝からも、放課後の部活も夜まで真剣に練習を重ねていた。

そのかいあって、朝霧がいない間でもある程度のチームになら勝てる用にもなってきた。

そこに朝霧が加われば鬼に金棒だが、井上的には朝霧は大事な所でしか使わない様にしたかった。それは、ミーティングでも話していた。

「というわけだ。いいか？予選はなるべく朝霧を使わないで行く！そのぐらいじゃないと甲子園でも勝てないからな」

「ハイ！」

「地方くらい一人で投げ切れるんだけどな」

「ダメだ！お前にもしもの事があつたらどうする？人の命より重いモノはないんだぞ」

「俺の命は俺が決める。野球人ならマウンドで死ねれば本望だ」

「アホ！それはあくまで例えだ。いいか？簡単に死ぬなんて言うなよ。次言ったら、本当に退部にするからな」

「お堅い監督だ。ここに入るんじゃないか。転校するか」

「それはダメ！楓はうちのエースなんだからね。他になんかいかせないよ」

「いかねえよ。色々面倒だしな。まあどうしても他の奴らから頼まれれば行くかもしれないがな」

「それって、メジャーでもか？」

「あ？メジャー？」

「朝霧くんなら、メジャーでも行けると思うんだけど。もし

甲子園に行けばスカウトも来るかも」

「楓なら行けるよね。どこでも」

「いけねえよ。俺は三年も生きれないんだ。卒業してプロになんかなれん」

「ごめん。そうだね」

「ああ、ちょっと軽く言っちゃった。悪い」

「そうしめるな。いいか？これからは俺の事は何も気にするな！お前らがわざと言ってるかどうかはわかる。そうじゃないなら俺は気にしない。まあ少し怒るけどな」

「気にするじゃん」

「よし、そこまでだ」

朝霧が少し和んで話しているのを見て井上はほっとしていた。それから今日の本題を話す。

「いいか。大会まで一ヶ月だ。少しでも力をつける為に合宿を行う！」

「合宿！？」

「そうだ。とは言っても、土日を使っての遠征みたいな感じになるがな」

「遠征」

「平日の部活はいつも通りの練習で、土日は練習試合を行う。このチームに足りないのは試合経験だ。練習はいつでもできるが、試合は中々できない。だから、どういう相手と当たっても良い様にこの一ヶ月の休みは相手校に出向き、試合をする。さすがに地方にはいけないが、同じ地区の所となら、やりやすいからな。そのつもりでいろ」

「ハイ！」

「俺は」

「朝霧、お前の許可は取ってある」

「許可って誰にだ？」

「洋子さんだ。もちろん無理をさせない程度にと、その行く学校から一番近い病院を把握しておくところを条件にな」

「ちい！手の早い事だ」

「ああ。お前ならあれこれ言って来なそうだからな。だから親の許可を取った」

「わったよ。素直にやるよ」

「というわけだが、何度も言うが、なるべく朝霧を使わないで勝てるようになるんだ。そして、朝霧は秘密兵器の感じで投入する。それができるように日々の練習も頑張るように」

「ハイ！」

こうしてミーティングは終わり、朝霧達はこれから毎週練習試合をする事になった。

――

今までは試合を申し込んでも断れる新華だったが、聖覇と東方をノーノーに抑えたことは東京中に知れ渡り、朝霧の名前を出せば、相手が試合をしたいというほどになっていた。

なので試合日程も井上は簡単に組むことができた。

その遠征最初の試合は甲子園にも一度出た事のある学校で、これまでなら新華が勝てるわけがないぐらいの力がある学校だが、今の新華はもう違い、一年も全員が必死になってプレイし、強くなっていた。

それでも、強豪校相手では朝霧抜きだときつく、試合終盤で、朝霧は抑えに回って出る事もあった。そして、朝霧が出るたびに相手校は驚きを隠せなかった。

それが毎週続き、いよいよ、地方大会まであと五日と言う日になり、そのころにはすでにスポーツ系のマスコミが朝霧の事を聞きつけ、新華に取材に来る事があった。

しかし、あの朝霧が素直におおじるわけではなく、全部断るが、取材陣は見るだけでもと、グラウンドの周りでカメラを構えていた。

そして、ついに地方大会の抽選会が行われる当日になった。この抽選会には選手なら誰でも来れるので、新華は代表で三島はもちろん、一条と高橋、監督の井上と神楽坂、そして朝霧を強引に連れて着ていた。

会場内の席で集まる朝霧達。それに他の選手たちが気づき皆、朝霧の事を話していた。

「さすがに注目されているな」

「そうですね。優勝校でもないのに」

「それだけ朝霧くんがしたことがすごいんだね」

「ああ。そうだな」

「俺は何もしてないぞ」

「素直じゃないな。わかってるくせに」

「なんか言ったか？」

「何にも」

「おい、そろそろ始まるぞ」

時間になり、抽選会が始まる。ここにはテレビも入っており盛大に行われる。

司会が色々話、その後に抽選が行われる。

「じゃ、じゃあ行ってくるぞ」

「がんばれキャプテン」

「落ち着いてね」

「良い所引いてくださいよ主将」

「色々いうな。緊張する」

抽選は主将がするので三島にとっては初めての
大仕事だった。くじを引くだけだが。

そしてその三島の番になると、あそこが朝霧のいる
学校だという小声が会場に木霊していた。

その三島がくじをひいた。そのくじはなんと一番だ。

つまり、地方大会の一回戦、初戦に新華が
登場する事になったのだ。

「初戦だ！」

「さすが主将。くじ運いいぜ」

「お前らな」

「いい仕事したな主将」

「監督まで」

井上は後より初戦を狙っていた。それは他校の試合を
見てからより、自分達のプレイができる初戦の方が
戦いやすいと思ったからだ。

それから抽選は進み、ここ西東京の組み合わせが
決まった。

地方大会開始！朝霧、初戦で存在感を見せる

抽選会が終わり、朝霧達新華学園は初戦から試合をする事になった。その初戦を明日に控えて、朝霧達はミーティングをしていた。

「以上が明日の先発レギュラーだ。朝霧、絶対無理はするなよ」

「わかってる」

「でも、あれだけ楓は使わないようにするって言ってたのに」

「しかたない。こいつがどうしても出たいってうるさいからな」

「初戦で負けたらもともこもないからな。相手が弱かったら

別だったんだがな」

「そうだな。相手は去年、この西区で聖覇に次ぐ二位の桜晴（おうせい）高校だからな。お前抜きだと少しきついな。相手は投手が三人いる。それに一度も対戦したことないチームだ。相手もこっちの情報は少ないだろうがそれでも経験差はあきらかだ。だから、朝霧を使う」

「でも、そういう相手だけど、自分から出たいって言うなんて朝霧くんらしくないな」

「別に、出ないのは暇だからだ。暇なら出てた方がましなだけだ」

「素直じゃないな。本当は出たいって言えばいいのに」

「やかましい。とりあえず、明日は俺が勝たせてやる！

新華初の公式戦を勝利にしてやるよ」

「それはうれしいが油断はするなよ。野球は何がおこるかわからないからな」

「大丈夫だ」

と自信満々に言っていた朝霧だが、その初戦がいよいよ始まり相手の桜晴が先行で新華が後攻になり、朝霧がそのマウンドに立った。

球場には多くの観客が見に来ていた。普通は一回戦や二回戦ぐらいじゃそこまで客は入らない。まだ夏休み前という事もあるからだが、この試合は違った。すでに朝霧の情報は東京中に広がっており、朝霧を見ようと大勢の客が来ていたのだ。もちろん、マスコミ系も多く、他校の下見も多かった。

その大勢の中での試合は初めてな新華野球部員達は練習中から緊張をしており、ミスを連発していた。そして時間になり、ベンチに集合する。

「やっぱり緊張してるね。でも、試合が始まったらそれは通じないよ！しっかり気合入れて全力でプレイするように」

「ハイ！」

「朝霧、大丈夫か」

「わからん」

「わからんってなんだ？」

「自分ではどうということじゃないんだが、体が固いのがわかる。頭は平気なのにな」

「それが緊張だ。公式戦という事のな。朝霧も含め、皆それを乗り越えないとこの先は続かないからね。自分で克服しなさい」

「ハイ！！」

「それじゃ行ってきなさい」

朝霧達は輪になって、気合を入れたが朝霧だけ立ったままでいた。時間になり、整列をする両校。審判があいさつをし両校もする。

そして、守備につく朝霧達。マウンドでは朝霧は平然な感じを出していたが、どこか何か体が違うのに気づいていた。

そんな中、審判のプレイボールが響き、試合が始まった。

キャッチャーの高橋は唯一、シニアでこういう経験はあるのでそこまで緊張はしていなかったが、朝霧の様子を気にしていたので、いつも通りに投げてみろと、真ん中を要求する。

それに朝霧はうなずき、最初の第一球を投げた。

しかし、球はものすごく速いのだが、ボールは審判より上に行き、後ろのフェンスに当たってしまった。

「やっぱ変だな」

朝霧は手を何度か握る動作をする。そこに高橋がやってきた。

「おい、大丈夫か？ただの緊張ならいいが、お前の場合は」

「大丈夫だ。ここに慣れてないだけだ。数球も投げれば

どうということはない」

「そうか。お前なら満塁にしてもその後は抑えられるからな。でも、それまでに慣れてくれよ」

「わかった」

高橋は戻った。打席では一番打者が余裕の顔をしていた。仕切り直し朝霧は第二球を投げるが、ボールになる。

それに相手校は挑発する。それから朝霧は先頭打者を歩かせてしまい、二番、三番もあるかせ、まだ一つのアウトも取れていなかった。

「監督、楓、大丈夫なんですか？」

「わからん。普通の投手なら自分で言うし、大体はわかるがあいつの事はどういう状況かはあいつから聞かないとわからんからな」

「楓」

ベンチの神楽坂と井上も心配している。マウンドでは一条達、内野陣も朝霧の所に集まっていた。

「大丈夫？朝霧くん」

「さすがにこれ以上はまずいぜ。次は四番だしな」

「わかってます。ようやく慣れて来たんで、あと三球ぐらいで戻ります」

「わかった。最悪、一点はいいからお前が状態がよくなるまで好きに投げろよ。俺達もフォーローするから」

「キャプテンらしい声ですね先輩」

「俺はキャプテンだ。でも、お前の方が実力は数千倍もあるからな。期待するぜ」

「朝霧くん。リラックスしていいからね」

「了解です。高橋」

「おう」

「全力で投げる。ケガするなよ」

「大丈夫だ。ちゃんと防具はつけてる」

「よし、行くぞ」

「おう！！」

朝霧達は気合を入れた。それに客達も声援を送る。相手校は同じように挑発をする。

試合が再開し、四番が打席に立つ。相手校は最高潮の盛り上がりを見せる。それが、朝霧が言った通り、三球続きで押し出しになってしまうという四球目に入った。

「静かにしやがれ！！」

朝霧は投げながらそうつぶやいた。そして、次の瞬間朝霧の球が信じられない速さで、高橋のミットに届き四番はまったく動けなかった。

そのすさまじいキャッチの音が球場全体を静寂にする。数秒してもコールがないので高橋が審判に話しかける。

「審判、コールは？」

「ス、ストラーイク！！」

そのコールと同時に球場がざわつきを取り戻した。これまで球は普通に早くしていたが、ボールばかりだったので余計にその早い球がストライクに入った事でよりすごさが伝わっていたのだ。

それは打席の打者も同じで、さっきまでの余裕が一瞬で消えた。

それ以降、朝霧は調子を戻し、そこから剛速球をど真ん中に連発する。

ノーアウトで、満塁だった桜晴は一点もとれず、四番から全員が三者三振で終わった。それに観客は驚き、いつまでもざわついていた。

さらに、その裏の新華の攻撃でも衝撃が走る。朝霧が一番に入り、攻撃が始まる。

相手の先発はエースだ。普通の高校なら手をやくほどの投手だが、状態を戻した朝霧にとっては小さい相手だった。

その投手が一球目を投げた。いきなりフォークが来るが朝霧はそれをジャストミートし、なんと、ホームランを打った。

それに球場がさらなるざわつきを出す。朝霧は悠々と

ホームを踏み、ベンチに戻る。それに他の部員達もいつものペースを取り戻し、朝霧以降も連打を打ち、一回でいきなり三点を取った。

そこからは朝霧の独壇場で、強豪校の打者を相手に全てストレートで抑え、打者としては二打席連続のホームランを打ち、その後は歩かされてしまったが桜晴に勝つ術もなく、朝霧がノーヒットで抑え、新華は一回戦を5対0で勝利し、一気にその名を轟かせた。

それは夕方すぐにわかった。地元の新聞はもちろん。マスコミも来ていたので、その試合がテレビに流れ、朝霧は超怪物として取り上げられたのだ。

地方大会決勝！再戦、新華学園VS聖覇学園！そして

初戦が終わり、次の日。二回戦は明日行われるので今日は休みだが、まだ夏休み前なので学校はある。

朝霧はいつも通りに朝起きて、早朝の部活に向かう。すると、朝早いにもかかわらず、大勢のマスコミなどがグラウンドの周りを囲んでいた。それはやはり地方大会の初戦で一気に全国区に広まった朝霧を見に来たり、取材をさせてもらうとしていたのだ。

他の部員達も来たが、ついでな感じで色々聞かれる。朝霧達は部室に行き、緊急会議をした。

「どうする主将。これじゃ練習できそうにないよ」

「そうだな。まさかこんな事になるなんてな。これも、朝霧の力だな」

「俺は普通に投げただけですが」

「お前にしてはな。公式戦でノーノーやればそれはくいつくさ！地方大会でもな」

「そうだね。それに、その前から朝霧くんの事は東京内では知られていたからね。そこに他県からも来てるんだからこうなるよね」

「それよりどうするんですか？このまま出ても囲まれますよ」

「朝霧、どうする？」

「たっく、めんどくせえな」

朝霧はため息をもらしながら部室を出た。そこにはやはりマスコミ系が押し寄せてきていたが、朝霧は何も答えず、グラウンドに向かう。

そのグラウンドに入る前に朝霧がマスコミ達に対して怒鳴る。

「練習の邪魔だ散れ！俺は性格悪いぞ。その俺に何か聞きたいなら、マナーを守れ。邪魔する奴には何も答えん」

朝霧のその声によりマスコミ達は驚き、しかたなく外に出た。そこに他の部員達も来て、練習が始まった。

朝練も終わり、授業を受ける。休み時間。朝霧の教室の周りには朝霧を見ようと他の生徒達が見に来ていた。朝霧はもう有名人になっていた。

そこに高橋と神楽坂がやってきた。

「すごいね楓。もうすっかり有名人だよ」

「本当だな。テレビでも取り上げられてるしな。おかげで俺も色々聞かれたぜ。お前とバッテリーをしてるからな」

「気が早い奴らばかりだな。迷惑極まりない」

「そう言わずにさ。せっかく有名になったんだし、もっと楽しまないと」

「俺がそんな性格に見えるか？何度も言うが、俺は今更楽しもうとか思わないからな」

「野球をしてるときでもか？」

「――その時だけだは少し楽しんでやる。相手をぶざまに負けさす事にな」

「本当に性格悪いな楓は。せっかくカッコいいのにそれじゃ女の子にモテないよ」

「そんなのも興味はない」

「それじゃ私が困るよ」

「何か言ったか？」

「別に。楓はスケベって言ったの」

「そんな風には聞こえなかったぞ」

「もう、楓のバカ」

そんな感じで休み時間は過ぎ、放課後の練習を迎える。明日の試合には朝霧は出さないと井上が話す。その試合の相手は昨日のよりは強くないからだ。

それでも、負けそうなら代打で出ると朝霧が言った。

――そうして、二回戦が始まった。相変わらず球場は満員に近い客が入っていたが、この試合は朝霧は出なかった。

試合は新華が3対2でギリギリ勝利した。その試合は地方の一、二回戦らしい試合だった。朝霧を見に来ていた者達も連投はないかと諦めて、試合を見ていた。

そこから新華は連勝し、朝霧が出なくても勝ち上がり、準決勝では抑えて朝霧が出て、相手にリードされていたが、やはり朝霧が逆転ホームランを打ち、勝利して決勝に進んだ。

もう、この頃には全国から朝霧を見に来ていたり、さらには

プロのスカウト達も全球団が見に来ていた。さらにはメジャーにも広まっていて、そのスカウトも来ている。

そして、いよいよ明日、西東京大会の決勝が行われる。相手はあの聖覇学園だ。当然、聖覇は朝霧にリベンジをするために訓練をしてきたので、ここまで全勝してきたのだ。

その朝霧は明日は先発で出る事になった。やはり、甲子園がかかった大事な試合なので、井上も朝霧に託したのだ。

その夜、朝霧は出かけていた。それは母親の洋子の家に向かったからだ。

そこは洋子が務める病院から歩いて行ける場所にありマンションだ。朝霧は一応連絡を先にして、洋子の部屋に入った。

「おかえり楓」

「帰ってきたわけじゃない。用があっただけだ」

「それでいいさ。飯はまだか？何か作ってやるぞ」

「そうだな。ただで食えるならもらってやる」

「素直じゃないな。楓」

「なんだ」

「悪かったな。皆に話して」

「まったくだ。だが、あんたのせいだけじゃない」

「お前がそう言ってくれとわな」

「別に、半分はあんたのせいだが、もう半分はあいつらがバカのせいだ。普通ならあんな事した俺を突き離す事ぐらいしてもいいのに、あいつらは簡単に許した。そんなのはあいつらがバカとしか思えん」

「そうかもしれないが、それは彼らの優しさだ。彼は野球をしているスポーツマンだ。その彼が同じ野球をしているお前を許すのは当然だ。チームメイトなんだしな」

「わからんな」

「今はわからなくてもいいさ。そのうちかる。ほらできたぞ」

洋子は料理をしながら話していた。できた料理を朝霧は食べた。それを見て洋子は楓も少しは素直になったなと思えた。

それから朝霧が話出した。それは明日の試合を見に来て

くれという事だった。それはたんに親だからではなくもしもの事を考えて、医者でもある洋子に来てほしいという朝霧の考えだった。

それでも、自分から言ってきてくれたのに洋子はうれしく見に行くと言った。

朝霧は自分の家に戻り、今度は隣の近衛も誘った。明日は日曜なので、近衛も来れると言った。

そうして、朝になり決勝の日になった。朝霧達は球場につきベンチに入る。そこにはすでに満員の客や試合が終わった他校、マスコミやスカウト達が見に来ていた。

この決勝も東京内でテレビ放送もされる。いつも以上の緊張が朝霧以外の部員達にはのしかかっていた。

それは相手の聖覇も同じだが、聖覇なんども経験をしているので、そこは相手の方が上だ。

その聖覇が練習を始め、新華はベンチで見ている。次に新華が練習を始めると、客達がいっせいに盛り上がる。

それは朝霧が出て来たからだ。最初の初戦以外は代打等でしか出ていないので、最初から朝霧が出てくる事がわかると、客達はテンションが上がっていた。

それは普通の客達だけじゃなく、新華側の応援団もそうだった。夏休みに入ってから毎試合応援をしてくれていた。去年までの新華では考えられない事だった。それも朝霧のおかげである。

時間になり、ついに決勝が始まる。両校整列しあいさつをする。両監督も握手をし、試合開始のブザーがなる。ついでにこの試合は二人の監督にも注目されていた。

一人は全国の常連校の名匠の監督として、そして、もう一人はおそらく全国初の女性監督として、甲子園に行くかという事だ。ましては井上は美人でスタイルもいいので、マスコミも井上には注目していた。でも、井上はそんな事よりこの試合にかけていた。

「いい？これに勝てば甲子園だよ！絶対負けられないからね」

「ハイ！」

「朝霧、任せたよ」

「わかってる」

「よし、行ってきなさい！」

「おう！！」

朝霧達はグラウンドに向かった。新華が後攻で聖覇が先攻だ。

聖覇の一番打者が打席に立ち、審判がプレイボールの合図を出し、試合が始まった。

朝霧は高橋と事前に決めていた事があった。それはこれまでと同じ様に打たれるまでは全球まっすぐで投げる事だった。

その朝霧の第一球は当然、まっすぐだった。球場はもう朝霧が投げるモーションに入るだけでざわついていた。

そしてそこに超速球のストレートが高橋のミットに突き刺さる。その速さに打者は当然、手が出ず、審判がアウト宣言をする。その球に球場がさらにざわつく。

「まったく、うるさいな。少しは黙れ」

と、朝霧は文句をいいながら投げる。一球、一球、その球がミットに入る音が響く。それだけ朝霧の球が重いという事だ。

受け取る高橋も、もう慣れてはいたが、やはり重さを感じていた。

一番を三振にし、二番、三番も三振を取り、一回表は終わり、裏の新華の攻撃に入る。そして、当然。新華の一番打者は朝霧だ。

球場が静かになる気配はなく、朝霧は苛立っていたが打席に入る。そして、相手のエース投手が第一球を投げた。

普通なら朝霧をわかっていれば敬遠もするのだが、球場の雰囲気敬遠をすればたたかれると思い、聖覇は朝霧と勝負に行った。

朝霧は球を見送った。アウトにはなったが、あと二つある。朝霧はその後も見送り、ボールも含めてフルカウントになった。

そして、次の球を朝霧は打った。相手は厳しい、インコースを投げたのだが、朝霧にはそんなの関係なく、簡単に打ち、やはり

ホームランになった。

そこからは朝霧の独壇場だ。投げては誰にも打たれず、ボール一つもない。打撃では朝霧以外の高橋達もヒットを打ち点こそ入らないものの、ヒットは出していた。

相手もエースを交代し、色々策を取るが、朝霧の前では何もできなかった。

そして、その時は訪れた。球場はようやく静まり返っていた。それは決勝で、相手は甲子園の強豪で、その相手から一つのヒットもボールも出さない、完全試合が目の前に迫ってきていたからだった。

試合を見に来ていた洋子も近衛も見守っている。点差はわずか1点だが、朝霧には十分だった。

最終回、聖覇の攻撃は二番からだ。これまでバットにはあてはするものの、前に飛ばせれない聖覇は何振り構わずバントに出てきていた。

しかし、朝霧の球を前に飛ばせず、アウトになる。三番もバントをするが、スリーバントの失敗になる。次が最後のバッターだ。相手は四番。唯一、朝霧のまっすをファールにしたバッターだが、朝霧は恐れることなく、投げる。

四番はバットにあてファールにするが、追い込まれた。そして朝霧は最後の球を投げた。

それは、今まで一番の最速の球だった。その球は日本最速以上の速さだ。そんな球に高校生が当てれることもなく、四番は三振し、試合が終了した。

新華学園初の甲子園を決めたのだ。しかも、朝霧の完全試合という快挙つきでだ。

高橋達がマウンドに行き、朝霧に抱き着く。

「やったぞ甲子園だ」

「よくやったぞ朝霧」

三島達も朝霧に詰め寄る。

「近づくな気持ち悪い」

「そういうな。今日は許せ」

そうって、高橋達は朝霧を胴上げした。

「ああ、あれは監督にするものなのに」

「いいさ。今日は、いや、この大会はあいつが主役だ」

井上も冷静に言うが、心の中ではうれしさが増していた。神楽坂も後で朝霧に抱き着いて、ベンチでキスをした。

閉会式も終わり、朝霧達は後日、学園で甲子園行きをお祝いされ、後はその甲子園が始まるのを待つだけだった。

神楽坂の告白！！いよいよ、甲子園が始まる

甲子園出場が決定してから数日が経った。大会まであと数日ある。朝霧は病院に居た。学校も夏休みに入り野球部は練習をするのだが甲子園初出場と女性監督の井上、そして、ここまでノーノーの超怪物朝霧がいるということで、全国からマスコミが押し寄せてきているので朝霧は対応するのがめんどいからと、自ら雲隠れのつもりで部員達しか知らないこの病院に逃げ込んでいた。

朝霧の部屋は個室で、入院している人も少ない病棟だ。なので朝霧は静かに居られた。

のだが.

「よう、暇してるか？」

「楓、遊べる物持ってきたよ」

「お前ら。ここは普通の家じゃねえって言ってんだろ」

「わかってるよ。でも、お前だって一人でさびしいだろ」

「一人になりたいからここに居るんだろうが。帰れ」

「もう、素直じゃないな。楓」

と、毎日の様に高橋と神楽坂が練習終わりに来ているので朝霧はゆっくりできなかつた。

「っていうわけでき。もうマスコミがすごいのって」

「ああ。俺的には歓迎だけどな。俺はプロに行きたいから、これで俺もスカウト達に名前を憶えられたし」

「お前、プロに行くのか？」

「言ってるだろ。高校野球やっている奴ならたいはそうだって。まっなれるのはほんの一握りだから厳しいのは違いないがな」

「そうだね。でも、楓は絶対慣れるよね。もう、メジャーからだって来てるんだから」

「俺はプロにはならん。それに一年も持たない奴を取ると思うか？」

「それは、でも、一試合でも出たら記録に残るよ」

「それはそれで面白いが、それもめんどくさい。甲子園だけで十分だ」

「もう、楓は」

「悪かったな。お前らはもう帰れ。毎回お前らが来てるからもうすぐここもばれる。もう、ばれてるかもしれんがな」

「わかったよ。でも、朝霧、ゆっくりできるのはあと数日だぞ！八月四日には抽選会だ。その前に甲子園の近くのホテルに泊まって準備もあるみたいだからな」

「わかってる。出発ギリギリに行くからそうっておいてくれ」

「しかたない。そうしておくか。マネージャー帰ろうぜ」

「あのさ、私もう少し残るね。二人で出ると目立つから、別々の方がいいかも」

「それもそうだな。じゃあな」

「うん。またね」

「もう、来るなよ」

「ははっ、また来てやる」

先に高橋は帰り、神楽坂が一人残った。朝霧はベッドに横になり神楽坂はその横で座っている。

「まだ帰らないのか？」

「今、スバルくんが出てたばかりでしょう。もう少しだけ」

「まあいいけどな。相手が一人なら俺はあいてにしなくていいからな」

「もう、楓のバカ。せっかく女の子が二人だけにいるのに」

「俺にはそんなの関係ないって言っただろ」

「近衛さんとは関係あるのに？」

「あれは俺のミスだ。悪いミスじゃないがな」

「だったら、わ、私とだって」

「お前、そうなりたいのか？」

「あ、えっと、その」

朝霧は起き上がり、神楽坂をベッドに押し倒した。困惑する神楽坂。彼女はもう気づいていた。自分が朝霧に好意を持っていることに。

最初は朝霧の野球のすごさに魅かれていただけだが、朝霧の事をしり、同情も入り、それから少しずつ、朝霧を助けてあげたいと思ひ、それがいつしか恋になって行ったことに。

だけど、朝霧はもう長くない。そこに告白をしても今の朝霧にはダメだろうからずっと隠していた。でも、甲子園が決まってベンチで

朝霧に思わず頬にキスをした事で本気になってしまっていた。

だから毎日この病院に来ていたのだ。

そして、甲子園が始まる前に神楽坂ははっきりしておこうとしていたのだった。

「何を黙ってる？」

「うん。ちょっとね。楓の事考えてたんだ」

「俺の事？」

「そう。もし、楓に私の寿命を与えたらなって」

「そんな事はできん。変な事を考えるな」

「へんな事じゃないよ。私は本気で楓を助けたいの。だってもしかしたら、高校を卒業する前に死んじゃうなんて、私だったら耐えられないよ」

「俺だって耐えられん。だからなんども死のうとしたんだがな」

「!？」

朝霧は手首にしていたリストバンドを取った。そこには手首を切った跡がふかく残っていた。そう、朝霧はなんども死のうとしたが、自分の弱さから死にきれなかった。

朝霧は他にも体に無数の傷跡がある。だから更衣室でも誰にも見られない様に、いつも一人で着替えていたのだ。たまには一緒になる時もあったが、その時は全部は脱がずにしていた。

「悪いな、こんな気持ち悪いのを見せて」

「ううん。楓の事が知れてうれしいよ」

「うれしいのか？こんなの見て」

「たぶん、そういう意味じゃないけど。でも、楓の事はもっと知りたい。ううん、全部知りたい。だって、楓が好きだから」

「. 変わった奴だなお前は」

「うん。自分でもそう思う。だけど、私は本当に好きだよ。それにこれが、初恋だしね」

「やっぱりか。野球バカだからそうだったか」

「野球バカって何よ。まあ当たってるけど。それで、返事は？」

「期待できると思ってるのか？」

「99%ないって思ってるよ」

「99か。いい数字だな。なら、残りの1%の方にしてやるか」

「え！？うん！！」

朝霧は神楽坂にキスをした。それも、ただ朝霧にしたら面白いからだと思ったのだが、実際にキスしたら朝霧も本気になった。

「楓」

「俺は面白い方にしただけだ。ここでお前を断ってもそれじゃ見えてる光景だからな。だから、お前が驚く方にした！それだけだ」

「楓、ありがとう」

「俺を本気にさせたいなら、もっとお前が努力するんだな」

「うん。それじゃ私の本気も見せてあげる」

神楽坂は服を脱ぎ、朝霧に抱き着く。そうして夜までずっと抱き合ってから神楽坂は帰って行った。

朝霧もさすがにここまでしたらと思い、神楽坂を思う事にした。

――そんな朝霧と神楽坂が結ばれ？てから数日経ち、朝霧達はついに甲子園にやってきた。

朝霧達は他校よりも早く到着した。それも、朝霧がいるので迷惑にならない様に配慮したからだ。

朝霧はいつもの表情だが、他の高橋達は甲子園の球場を見て、茫然としていた。それは、本当に自分達がここに立てるんだという事が現実になったからだ。

それから井上の指示で泊まるホテルに入り、今日はミーティングだけをした。そんな感じであっという間に時間は過ぎ、開会式の練習と、抽選会が行われた。

そして、やはりというべきか、三島はここでも初戦を引き当てた。それに会場が湧いた。超怪物、朝霧が初戦で出てくるかもしれないからだ。

抽選会も終わり、八月七日になり、記念すべき、第100回の全国高校野球選手権大会が始まった。

甲子園史上最大の記録を朝霧が作る！？

ついに甲子園が始まった。超満員の客に、日本だけでなく、世界各国からのスカウトやマスコミ、未だかつてないほどの規模になっているこの状況を作った朝霧が初戦から出てくる。

抽選で初戦を引いた新華の相手をするのは、去年の甲子園で三位になった強豪校の鳴滝高校だ。普通なら鳴滝が勝ち上がると誰もが思うが朝霧が出ることでその予想は消えたしまう。

その朝霧達がグラウンドに出てきて練習が始まる。試合まであと数十分。朝霧以外の部員達はやはり緊張をしていた。この大舞台で初めての試合だ。緊張しないわけがない。それは三島も一条も同じだった。

なんとか練習を終え、ベンチに戻る部員達。

「やっぱ、すごいなここは」

「うん。こんな緊張感初めてだよ。まだ手が震えてる」

「俺達もです。本当にここで試合するのかって」

「そ、そうだよな。去年まで一回も勝ててなかったのに」

一条達や二年生は去年まで勝ち星とは無縁だったのに今年はこの場所に居る事に動揺していた。

「皆大丈夫？いくら楓が投げるとは言っても、打つ方も大事なんだからね。楓には負担もかけられないんだから」

「そうだけどな」

「ああ」

神楽坂も皆を心配していた。試合に出ない自分ですら緊張をしているのだから、選手はもっと緊張しているという事を。

「集合！やっぱりすごいねここわ。でも、これからはここが試合をする場所だよ。あなた達はもうそれだけの選手なんだから、自信を持って試合しないさい」

「ハイ！」

「朝霧、お前も緊張してるみたいだな」

「あ？そんなのしてない。客がいようが試合はいつも同じ型なんだ。なんの変わりもない」

「だといいがな。本当はお前に負担をさせないように
したいが、やはり初戦は勝ちたい。だから頼むな」
「わかっています」

さすがの井上もここでの勝ちは特別なものだ。だからこそ
朝霧に託した。

そして、時間になり選手達がグラウンドに集結する。両校
整列し、一礼をする。後攻の朝霧達が守備に散る。

鳴滝の一番打者が打席立ち、ついに試合が始まる。

試合はテレビでも放送され、全国が注目する中、朝霧が
その第一球を投げる。ここでは球の速さも表示されるので
朝霧の速球が一番注目された。

朝霧の投げた球が高橋のミットに入る。打者は手が
出なかった。それもそうだ、投げた瞬間にもう球がミットに
入ったのだから。それに審判も驚くが、球場全体はさらに
驚いていた。

スピードガンで表示された朝霧の時速はなんと一球で
日本最速の163kだった。しかし、ボードの表示はそれ
以上は出せないので、もしかしたらもっと早いかも
しれない。

それでも、朝霧はたった一球で日本最速を出したことには
違いなかった。

その後も朝霧は160越えを出し続け、三者三振に取った。

「ナイスって以上だな楓」

「別に、いつもの事だ」

「そうだな。まったく、とんでもない奴だ」

ベンチに戻る時に高橋と話す朝霧。いつもの朝霧と同じで
本当に緊張してないんだなと高橋は思った。

ベンチに戻っても朝霧はすぐにグラウンドに出た。そう朝霧は
一番打者だ。これも甲子園ではおそくない打順だ。

朝霧がコールされると球場は異常な盛り上がりを見せる。

それは新華学園の応援だけではなく、球場全体が
朝霧を応援しているかのようだった。

打席に立ち、構える朝霧。すると、相手バッテリーは朝霧を歩かせる作戦を取った。キャッチャーが立ち上がり投手がストライクを外す。

それにやはり球場全体が大ブーイングした。しかし、勝つ為には相手校も必死だ。朝霧の事はしれられているので当然の作ともいえる。だが、朝霧もその対策はしていた。

と言っても大きくはずれている球を打つことはいくら朝霧でもできないので、朝霧はなんとバットを振り自らアウトにしていた。それに、驚いた客達だが、すぐに歓声に変わった。

そして歩かせるはずの朝霧は三振になり、その朝霧に客達は拍手喝采をした。

その後、それに動揺したのか、相手の投手はうまく投げれず一条や三島、高橋に打たれ、朝霧以外で点を取れてしまい鳴滝側は慌ただしくなった。

それから朝霧は変わらず全打者三振にし、打席でも相手はわかりずらいようにボールを取りにこうとするが、朝霧の前では普通のボールはヒットゾーンだった。簡単にホームランを打ち、点差は開いていく。

その結果、試合は新華の圧勝、5対0でさらに朝霧の記録づくめで試合が終了した。

甲子園では試合後、インタビューがあるのだが、これも甲子園初の女性監督の出場と勝利で井上も取材を受ける。

でも、一番の対象である朝霧は取材を断り、さっさとホテルに戻ってしまっていたが、その日のテレビでも夕方の新聞でも朝霧の事でもちきりだった。

準決勝まで完全試合の朝霧。そして、最後の決勝へ

次の日の早朝、朝霧はホテルから出ようとした。すると、ホテルのロビーにはたくさんの報道陣が居た。普通の時でも選手の泊まる場所にはあまり近づかないのだが、今回は朝霧がいるので、少しでも取材しようとマスコミはホテルに集まっていた。

そこにその朝霧が現れ、カメラ等が一気に朝霧を囲んだ。

「あの、このまま優勝できそうですか」

「どこまで球速をあげれますか？」

と質問攻めに合う朝霧。いつもなら無視して通り過ぎるのだが今は少し違っていた。

「優勝はする。球速はわからん。なんなら次に全力で投げてやろうか」

「全力って、まだ本気じゃないんですか？」

「全然」

「あの、プロには入るんですよね」

「さあな。興味はない。まあ交渉しただ」

そんな感じで話しをして、その後ランニングに出た。それから部屋に戻り、ミーティングをする。

一回戦を終え、少し緊張も解けてきた部員達。それも朝霧のおかげなのだろう。朝霧も少しずつだが、丸くなっている感じもしていた。

そうして、二回戦、三回戦、準々決勝と準決勝を勝ち上がって行った。もちろん、朝霧の全部パーフェクト勝利でだ。

後、一試合、つまり決勝を勝てば朝霧は前人未到の甲子園全パーフェクトを達成するという快挙がなさせられるとあって報道は朝霧の事でいっぱいだった。

その朝霧は決勝前日、部屋で一人、いや、神楽坂と一緒に居た。その前までは部員達も朝霧の親の洋子も近衛までいて騒いでいたのだが、朝霧を休ませるために早めに上がり今の状況になっていた。

「後一回だね楓」

「ああ。そうだな」

「体、大丈夫？」

「さあな。自分の体程、わからんものはない。ここまで無茶はしてないつもりだが、どうにも調子は悪い」

「後一回だけど、絶対無理したらダメだよ。もし楓になにかあったら私」

「俺になにかあるのは当たり前だ。それを前提にお前は俺と付き合ってるんだろが」

「そうだけど。やっぱりずっと居てほしいから」

「それは神のみぞ知るだ。まあ少なくとも、今の俺も簡単に死ぬわけにはいかなかったからな。そう心配するな」

「楓」

神楽坂は井上の許可を得て、朝霧と一緒に部屋で寝る事にした。それは朝霧も悪くはないと感じていた、

そして、いよいよ決勝の日がやってきた。球場は異様な盛り上がりを見せていた。

そんな中で試合をする、特に相手校はおかしな球場の空気を読み取っていた。

決勝の相手は前回優勝校で、全国でもトップとされている白光学園（はくこうがくえん）だ。いつもなら白光の応援が多いのだが、自分達の学園応援団以外は相手の新華、いやおそらく朝霧の応援をしているとも感じていた。

両校ベンチに入り、それぞれ練習を始める。そうして時間になり、決勝が行われようとしていた。

ラストゲーム！朝霧死す！？彼の残した記録と記憶

両校あいさつをし、後攻の新華が守備につく。しかし、朝霧がホームを背にして前を向こうとしなかった。

それに気づいた高橋が立ち上がり、声をかけた。

「朝霧！大丈夫か」

「！？ああ、大丈夫だ」

返事をしてようやくポジションにつく。朝霧は何か違和感を感じていたが審判が宣言し試合が始まった。

高橋からサインが来るが、朝霧は気づいたのかわからない感じでうなずいた。それに高橋も様子がおかしいのに気づいたが、今はタイムを取れない。そして、朝霧は第一球を投げた。

だが、その球は審判より高く上がり、バックネットに突き刺さった。それに球場全体も驚いていた。

思わず高橋も立ち上がり、タイムを取った。

「お前、まさか」

「大丈夫だ。散れ、一球でタイムを使うんじゃねえ」

「でもよ。お前、汗がすごいぞ」

「本当だね。朝霧くん、無理はダメだよ」

「わかってる。大丈夫だから」

高橋達は戻った。朝霧も一呼吸し落ち着かせる。次の二球目はいつも通りにど真ん中に入り、アウトを取った。朝霧が一球投げごとに歓声があがる甲子園。

一回表は最初は外したものの、後は全て三振に取り、この日もノーヒットノーランの期待が球場全体を包んでいた。

ベンチに戻り、すぐに打席に行こうとする朝霧だが、井上に止められた。

「朝霧！帽子を変えろ」

「？．．．ああ、悪い」

「朝霧、お前どこがおかしいぞ」

「別に、いつも通りだ。気にするな」

「楓、本当に大丈夫？」

「大丈夫だほのか。行ってくる」

朝霧は帽子をメットに変えて打席に向かった。一番、ピッチャー朝霧の名前がコールされ、さわぎたつ球場。

その打席で、朝霧は左打席に立った。これまでも右と左に立ち、スイッチなのはわかっているが、相手が朝霧なので相手からすればそれだけでやっか이었다。しかも、一番というのが余計だ。

白光の投手はエースでスカウトもされる程だが、朝霧には関係なく、第一球の厳しいコースに来るスライダーさえ簡単にバットに当ててしまった。その球は高くあがり、誰もがホームランだと思ったが、バックスクリーン前で球は落ち、センターフライになってしまった。その瞬間、球場がため息をついた。白光だけは安心のため息だった。朝霧はベンチに戻り、悔しがることなく座る。

それに、神楽坂が朝霧の様子がおかしいのに気づいた。

「楓、交代してもらって」

「何を言ってる？まだ一回だぞ」

「だけど、その汗、おかしいよ。また倒れるんじゃない」

「今日は暑いだけだ。夏だからな」

「楓はそんなの関係ないじゃん。どんな炎天下でも平然としてるのに」

「たまにはこういう日もある。俺も完全じゃない」

「そうだから今日はもう」

「監督、俺を変えますか？」

「そうだな。神楽坂のいう事もわかるが、大丈夫なら投げてもらいたい。今お前を変えるとおそらく、大事になるだろうからな」

「でも、命の問題ですよ。それより守らなきゃいけないものはないです」

「落ち着け神楽坂。私も朝霧が無理だと思ったら変える。例え批判されても、お前の言う通り、命には変えられんからな」

「わかりました。楓、何かあったらすぐに変えるよ」

「わかったよ」

朝霧は大人しくしたがった？その間に新華の攻撃は終わっていた。さすがに全国優勝校のエース相手では一条でも

すぐには対応できなかった。

裏の守り、朝霧はマウンドに向かう。それからいつもの通り投げ、優勝校相手にもノーノーを続けたが、朝霧の疲れは誰が見てもピークだった。七回の攻撃、ここまで新華もヒットは出すが、点は取れておらず、試合は零ゲームが続いていた。

この回、朝霧に打順が回るが、井上は迷っていた。朝霧はこれまでに見せたことのない汗と息切れをしており、どう見ても限界に近かったが、朝霧がいう事を聞く事もなく、勝手にネクストサークルに入ってしまった。

そして、朝霧の打順になり、打席に入る。ここまで、朝霧は外野フライで終わっている。いつもならホームランになる打球が外野で止まっているのは明らかに疲れからだ。それを客達もわかっているが、変わって欲しくないのが現状だった。

相手も今日の朝霧なら打ち取れると思いき、歩かせず勝負に来る。朝霧もバットを振らず、アウト二つまでは見逃す。

その次の三球目、相手はインコースに投げた。朝霧はそれをわかっていたので、バットを振る前に、ステップをし、バットが当たる距離を取り、その球を打った。そしてその打球はようやくバックスクリーンに届き、ホームランになった。これまで緊張が包んでいた球場が湧いた。

ホームを踏み、ベンチに戻る朝霧。

「どうだ、まだ行けるぞ」

「もう、楓ったら」

「本当に強いやつだなお前は」

一応、神楽坂も井上も安心したようだ。それを客席から見てた洋子も近衛も安心する。

しかし。

すでに朝霧の体は限界だった。この超速球を投げるのにどれだけの体力が削られるか、これまでにつけた傷がどれだけ負担になっているか、朝霧の体はすでに悲鳴をあげていた。

それでも、朝霧は投げ、ついに、1対0で最終回表、新華の守りになる。この表で点を取られなければ新華の勝利だ。

つまり、後アウト三つで朝霧の甲子園初、全試合、ノーヒットノーランという快挙が成し遂げられるのだ。

その朝霧がマウンドに上がると、朝霧コールが流れる。テレビもその異様さを伝えていた。もう、全員がノーノーが確定していると思っているからだ。

一度、マウンドに高橋達は集まる。

「朝霧、後一回で優勝だぞ」

「うん。しかも、全試合の完全試合なんてこれからも作られない記録が残るよ」

「ああ、その主役と一緒にチームなんて俺は感激だぜ」

「朝霧、絶対抑えるぞ。朝霧？」

高橋が話しかけるが返事がない。朝霧は下を向いたまま皆の声を聞いていなかった。

「そうだな。後、三つだ」

「ああ、勝とうぜ」

「よし、勝つぞ！！」

「おう！！」

三島達は気合を入れるが、朝霧はしなかった。ポジションに戻り、高橋はサインを出す。これまで、ストレート以外のサインは出しておらず、コースだけを変えていた。

それだけで高校生では朝霧の170を超えている速球を打てる事はなかったからだ。この、残り三人も同じ様にアウトを取りに行く。

この回の白光は二番からだ。その二番を三振にし、三番も三振にする。そして、あと、一人となりその相手は四番だ。

白光も最後の力を出そうとしている。その応援が新華だけじゃないという事をわからせていた。

その中で朝霧は投げる。一つ、二つとアウトを取り、いよいよ後一球で試合が終わる。球場は当然、あと一球コールをする。

高橋がサインを出し、朝霧はうなづく。そのラストボールが投げられた。

四番打者は思いっきりバットを振りに来たが、その球には当たらず、ボールがミットに入った。その音が一瞬、球場の声援をかきけした。しかし、その静寂は一瞬でどよめきに変わった。

高橋はボールを取った瞬間に朝霧に抱き着きに行こうとしたが、そこに朝霧の姿がなかった。

「朝霧！！」

高橋が声をあげる。そこにはマウンドで倒れている朝霧の姿があった。

「楓！！」

ベンチから神楽坂も飛び出してしまう。ゲームセットのコールはされているが、整列はできなかった。

マウンドに全員がかけより、朝霧に声をかけるが返事をする事はなかった。泣きながら声をかける神楽坂。

一体何が起こったのか相手校も新華野球部以外の者達は誰もわからなかった。ただ、これまでの投球で疲れて倒れただけだと思っている者もいるが、新華野球部員が全員、集まってるのはおかしいと感じていた。

そして、井上は洋子を呼び、高橋達は朝霧を抱えてベンチに帰る。

しかし、洋子が来たときにはもう朝霧の心臓は止まっていた。何度も心臓マッサージをする洋子だが、朝霧が起きる事はなかった。

神楽坂達は どうして今という思いにもなっていた。それは余命は三年だと聞かされていたからだ。しかし、これまで投げ続けた負担から朝霧の命は削られていた。だから、一年、持たなかったのだ。

翌日、新華学園が井上に記者会見を行わせた。そこには親の洋子も同席し、朝霧に何が起こったのかを説明した。

そうして、昨日、朝霧が亡くなった事が発表され、世界中が驚愕した。神楽坂はずっと朝霧のそばで泣いていた。それは高橋達も同じで、朝霧の遺体はその日は病院の部屋にとどめられた。

衝撃の甲子園が終わった。結果は新華の優勝ではあるが部員は誰も喜びはしなかった。

それでも、朝霧は前人未到の記録を甲子園で作り、朝霧は記憶にも残る事になった。

――それから一年が経ち、また甲子園の時期が始まるが今年から甲子園に朝霧の記念碑が建てられていた。

それは甲子園をホームにしている球団を始め、メジャーからも声があり、ここに世界一の投手が現れたと言うメッセージが建てられた。

甲子園が始まる時、朝霧に黙とうをする事になった。

この年、朝霧なしの新華学園が優勝をし、次の年も勝ち、三連覇を達成させ、全国に新華の名を轟かせた。

その後、部員達は半分がプロになったりし、井上も監督を継続している。そして、神楽坂はプロになった高橋と結婚をした。実は神楽坂は朝霧の子を身ごもっていたのだ。それを高橋に教え、朝霧の変わりに育てるといい二人は結婚した。

その朝霧と神楽坂の子は無事に生まれ、二人は息子を朝霧と同じ様な選手に育てようと頑張っていた。

そうして、十六年後。その二人の子供が成長し、野球をしていて、同じ、新華学園野球部として甲子園に立ち優勝をしたのだった。